

## 医療における AI の導入を考える

新潟県医師会

理事 田 中 篤



「チェスは知性をはかる試金石である。」という言葉ゲーテは残したそうだが、史上最強のチェス世界チャンピオンと言われたカスパロフが、1997年 IBM の開発したスーパーコンピューターに負けた。その後の AI の進歩は著しく、そして加速化していて、碁や将棋でも、もう人間は AI に勝てなくなっている。

医療の領域においても、AI の進出は著しい。AI の診断能力に関して発表された研究論文を用いてメタ解析を実施した最近の論文では、AI の平均診断精度は医師全体と有意差がなかった。専門医は AI よりも診断精度が有意に高かったとのことで、AI の実力はかなりのものになってはいるものの、専門医の方が診断能力はまだ上とほっとしていた。ところが最近、皮膚科診療において病歴や臨床所見、臨床写真、病理画像、検査データに基づいた診断において、皮膚科専門医と AI との正診率を比較して、統計学的に有意差がなかったという論文が出た。

AI は、このように診断などの医療的な判断目的の活用のほかに、カルテや入院サマリー、紹介状の作成による業務効率化を目的とした活用がある。残念ながら、日本の医療現場では AI の導入はなかなか進んでいない。この分野で AI の活用が遅れている原因の一つは、電子カルテを扱うパソコンがインターネットに接続されていないことがあり、生成 AI を搭載した電子カルテやクラウド型のカルテの普及が求められている。また、診断や治療の支援を行う AI のほとんどが医療機器に該当し、医療機器の審査に時間がかかることが普及を遅らせていることも指摘されている。さらには、AI 医療機器の導入が診療報酬上で評価されず、導入費用やランニングコストが医療機関の持ち出しになっていることも普及を妨げているとされており、これらの早急の改善が必要となっている。

対話型 AI は、治療面でも期待されていて実際に

導入されつつある。高齢者の認知機能の維持や認知症の周辺症状の緩和・抑制効果、抗精神病薬の減薬といった成果事例、自閉スペクトラム症の子どもが AI との対話を通じて社会的コミュニケーションを学ぶ事例、AI を利用した24時間利用可能なカウンセリングの実践などが報告され始めている。

最近、個人的にとっても驚かされたことがある。AI が「心の理論」と呼ばれる能力を獲得し始めた可能性を示唆する論文が出た。心の理論とは、他者の心を類推し理解する能力であり、今のところヒト以外では類人猿のみがある程度の能力を持っている可能性が指摘されているくらいで、人間の社会性獲得に重要な能力とされており、自閉スペクトラム症の患者において障害されている能力の一つである。また、相次いで今年発表された調査結果にも驚かされた。対話型 AI に愛着対象を求めている人たちがかなりの割合で出現し始めていて、また、感情を共有できる対象として、AI が親友や親と同等か、それらより上回っている人たちの出現である。

急速に進歩・変化する社会・医療とそれに比例して飛躍的に増大する情報量などに対応するには、AI の利活用はもはや避けられない。しかし、AI は、もっともらしい嘘をつく危険性（まるで夢を見ているかのように、現実と虚構が混ざった状態を生み出すことから「hallucination（幻覚）」と呼ばれている。）が指摘されている。さらには、AI との関係が人間同士の関係の代替になってしまい、人々が AI に強い愛着を感じるあまり、現実の人間関係を疎遠にしたり、社会的孤立を深めるのではないかという懸念も指摘されている。さらについて最近、ChatGPT が16歳の少年の自殺を助長したとして、少年の両親が提訴したというニュースが流れるなどあり、AI の弊害や危険性については、注意深く検証していく必要があると思われる。